

序文・第 1 条

前回のおさらい

■『歎異抄』の著者について

- ・『歎異抄』の著者は、親鸞聖人の直弟子である河和田の唯円（1222-1289 頃）が定説。
- ・常陸の河和田（現在の茨城県水戸市）報仏寺の開基。聖人と唯円は 49 歳差
- ・執筆時期は聖人が往生した 20 年ほど経過し、唯円が 60 歳を過ぎた頃と推定

■『歎異抄』の性格

- ・親鸞聖人の言葉を集めた「言行録」。
- ・親鸞聖人の滅後に広まった異義に対する、唯円の「歎異」

⇒ 親鸞聖人の言葉を基準・拠り所として、唯円が異義を歎異する



序文 ～撰述の意図～

ひそかに愚案を回らしてほぼ古今を勘ふるに、先師（親鸞）の口伝の真信に異なることを歎き、後学相続の疑惑あることを思ふに、幸ひに有縁の知識によらずは、いかでか易行の一門に入ることが得んや。まったく自見の覚語をもつて他力の宗旨を乱ることなかれ。よつて故親鸞聖人の御物語の趣、耳の底に留むるところ、いささかこれをするす。ひとへに同心行者の不審を散ぜんがためなりと〔云々〕。

現代語訳

わたしなりにつたない思いをめぐらして、親鸞聖人がおいでになったころと今とをくらべてみますと、このごろは、聖人から直接お聞きした真実の信心とは異なることが説かれていて、歎かわしいことです。これでは、後のものが教えを受け継いでいくにあたり、さまざま疑いや迷いがおきるのではないかと思います。幸いにも縁あって、まことの教えを示してくださる方に出会うことがなかったなら、どうしてこの易行の道に入ることができるでしょうか。決して、自分勝手な考えにとらわれて、本願他力の教えのかなめを思い誤ることがあってはなりません。

そこで、今は亡き親鸞聖人がお聞かせくださったお言葉のうち、耳の底に残って忘れられないものを、少しばかり書き記すことにします。これはただ、同じ念仏の道を歩まれる人々の疑問を取り除きたいからです。

■異義の発生

親鸞聖人の生涯区分

- ①比叡山時代（9歳～29歳）
- ②吉水時代（29歳～35歳）
- ③越後時代（35歳～42歳）
- ④関東時代（42歳～62歳頃）
- ⑤京都時代（62歳頃～90歳）



関東時代、親鸞聖人には多くの門弟がいたが、京都に戻られた後、関東に誤った考え（異義）が出てきた。聖人は手紙を送るなどして関東の門弟たちを指導するが、聖人が亡くなると、再び異義が出現しやすい状況が生まれていた。

⇒ 異義篇（第11条～第18条）

■「有縁の知識によらずは～」

浄土真宗の教えは、有縁の知識（善知識）との出遇いを通して聞いていくことがとても大切。「自見の覚悟（自己流の見解）」では、間違いに陥ってしまう。

⇒ 親鸞聖人の言葉を通して、私達は宗祖と同じお念仏の道（易行）を歩ませていただく。

「御文章」～聖人一流章～

聖人一流の御勸化のおもむきは、信心をもつて本とせられ候ふ。

親鸞聖人がお示しになり、変わることなく伝えられている浄土真宗のご法義は、他力の信心を根本とする教えです。



内藤 知康和上 [1945～2022]

（本願寺派勸学・龍谷大学名誉教授）

『聖典読解シリーズ7 歎異抄』12頁

「自見の覚悟をもつて、他力の宗旨を乱ることなかれ」という言葉は、単に唯円が当時の異義者に対して戒められた言葉であるということにとどまらず、親鸞聖人の教えを受け継いでゆこうとしている現代の我々をも戒める言葉として受け取るべきでしょう。

第 1 条 ～本願のころ～

弥陀の誓願不思議にたすけられまゐらせて、往生をばとぐるなりと信じて念仏申さんとおもひたつころのおこるとき、すなはち摂取不捨の利益にあづけしめたまふなり。弥陀の本願には、老少・善悪のひとをえられず、ただ信心を要とすとしるべし。

そのゆゑは、罪惡深重・煩惱熾盛の衆生をたすけんがための願にまします。しかれば本願を信ぜんには、他の善も要にあらず、念仏にまさるべき善なきゆゑに。悪をもおそるべからず、弥陀の本願をさまたぐるほどの悪なきゆゑにと〔云々〕。

現代語訳

阿弥陀仏の誓願の不可思議なはたらきにお救いいただいて、必ず浄土に往生するのであると信じて、念仏を称えようという思いがおこるとき、ただちに阿弥陀仏は、その光明の中に摂め取って決して捨てないという利益をお与えくださるのです。阿弥陀仏の本願は老いも若きも善人も悪人もわけへだてなさいません。ただ、その本願を聞きひらく信心がかなめであると心得なければなりません。

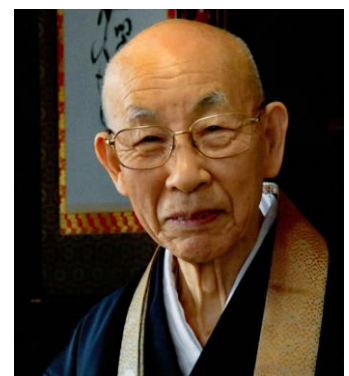
なぜなら、深く重い罪を持ち、激しい煩惱をかかえて生きるものを救おうとしておこされた願いだからです。ですから、本願を信じるものには、念仏以外のどんな善もありません。念仏よりもすぐれた善はないからです。また、どんな悪も恐れることはありません。阿弥陀仏の本願をさまたげるほどの悪はないからです。このように聖人は仰せになりました。

梯 實圓和上 [1927～2014]

(本願寺派勧学・元教学研究所所長)

『聖典セミナー 歎異抄』25 頁

この第 1 条には、浄土真宗の教えのすべてが要約されています。こんなに簡潔に、しかも感動的に見事に真宗を語りつくされたことばは、親鸞聖人ご自身の著作のなかにも見あたらないほどです。



■「弥陀の誓願」

阿弥陀仏の誓願とは、広くいえば法蔵菩薩が建てた四十八願であるが、ここでは第十八願を指す。この第十八願こそが四十八願の中でも「根本の願」であることから「本願」とよばれる。

第十八願（本願）

たとひわれ仏を得たらんに、十方の衆生、至心に信樂してわが国に生れんと欲ひて、乃至十念せん。もし生れざれば正覺を取らじ。ただ五逆と誹謗正法を除く。（『仏説無量壽經』）

もし私が仏になったとしても、あらゆる世界に住む生きとし生けるものが、疑いのない心を持って私の浄土に生まれられるとおもうて、たとえば十声であってもわが名を称える者は、必ず往生させましょう。もし生まれさせることができないようなら、私は決して仏にはなりません。ただ五逆罪を造り、仏法を誹って回心しない者は除外する。

五逆 …… 5つの重罪。殺母（母を殺す）、殺父（父を殺す）、殺阿羅漢（聖者を殺す）、出仏身血（仏のからだを傷つける）、破和合僧（教団を分裂させて乱す）

誹法 …… 正法すなわち仏法を誹謗すること

親鸞聖人『尊号真像銘文』（現代語訳）

「ただ五逆と、正法を誹謗するものを除く」というのは、「唯除」というのは「ただ除く」という言葉です。五逆の罪を犯す人を嫌い、仏法を誇ることがいかに重い罪であるかを知らせようとされているのです。この二つの罪の重いことを知らせて（回心させ、これらの罪人も含めて）、十方世界の一切の衆生がみな漏れることなく往生することができると知らせようとされているのです。

本願を受け入れ（信じて）、念仏するということは、阿弥陀仏の願いを受け入れるということ。如来の願いとは、「お願いだから、本当に（至心）、疑いなく（信樂）、わが国に生まれることができると思って（欲生我国）、たとえば十遍でも念仏申しておくれ（乃至十念）」という慈愛の願い。浄土真宗の信心とは、阿弥陀仏の願いが私に届いていることであるから、「如来よりたまはりたる信心」（『歎異抄』後序）といわれる。

⇒ 信心正因（如来の本願を受け入れる信心が、往生成仏のまさしき因である）

親鸞聖人の「信心正因」に関する説示

- ・ 正定の因はただ信心なり（行文類）
- ・ 大信心はすなはちこれ…中略…証大涅槃の真因（信文類）
- ・ 涅槃の真因はただ信心をもつてす。（信文類） ……ほか多数

■「不思議」とは

いつつの不思議をとくなかに 仏法不思議にしくぞなき
仏法不思議といふことは 弥陀の弘誓になづけたり（高僧和讃）



第8代・蓮如上人
(1415～1499)

『蓮如上人御一代記聞書』（現代語訳）

法敬坊が蓮如上人に、「上人のお書きになった六字のお名号が、火事にあって焼けたとき、六体の仏となりました。まことに不思議なことでございます」と申しあげました。すると上人は、「それは不思議なことでもない。六字の名号はもともと仏なのだから、その仏が仏になられたからといって不思議なことではない。それよりも、罪深い凡夫が、弥陀におまかせする信心ただ一つで仏になるということこそ、本当に不思議なことではないか」と仰せになりました。

内藤 知康和上（『本願寺新報』2017年05月01日号より抜粋）

『尊号真像銘文』という書物において親鸞聖人は、仏は真実そのものであり、私たちには一片の真実も無いとお示しになります。まさしく私たちと仏とは真反対の存在であるということができるとでしょう。そして、仏と真反対の私であると知ると、このような私が仏になることができるとは、とても思えません。そのようなあり得ないと感じることが私の身におこるとというのが、誓願不思議なのであり、『歎異抄』の「弥陀の誓願不思議にたすけられまゐらせて」の「誓願不思議」もそのような不思議と頂くべきなのです。

■「往生をばとぐるなりと信じて念仏申さんとおもひたつところのおこるとき、すなはち摂取不捨の利益にあづけしめたまふなり」

必ず浄土に往生するのであると信じて、念仏を称えようという思いがおこるとき、ただちに阿弥陀仏は、その光明の中に摂め取って決して捨てないという利益をお与えくださるのです。

⇒ 阿弥陀仏の願いを受け入れるということは、「念仏往生と信ずる」こと。

如来の本願を受け入れた信心の行者の上には、念仏となってあらわれる。

※ 浄土真宗の「信心」とは、自分の心の中に確かなものを作り上げるのではなく、弥陀の本願に対して「疑いのない状態」をいう。

「信」はうたがひなきころなり、すなはちこれ真実の信心なり、虚仮はなれたるころなり。(親鸞聖人『唯信鈔文意』)

親鸞聖人の「信心」と「念仏」に関する説示

- ・ 真実の信心は必ず名号を具す。名号は必ずしも願力の信心を具せざるなり。
(信文類)

『親鸞聖人御消息』(現代語訳)

行というのは、本願に誓われている名号を一声称えて浄土に往生するというのを聞いて、一声でも称え、あるいは十声でも称えることをいうのであり、この本願を聞いて、疑う心が少しもないことを信の一念というのです。ですから信と行とは二つではありますが、名号を一声称えて往生すると聞いて疑う心がないので、行を離れた信はないとうかがっています。また、信を離れた行もないとお考えください。

⇒ 行信不離 (念仏と信心とはセット)

■「弥陀の本願には、老少・善悪のひとをえられず、ただ信心を要とすとするべし」

阿弥陀仏の本願は老いも若きも善人も悪人もわけへだてなさいません。ただ、その本願を聞きひらく信心がかなめであると心得なければなりません。

「老少・善悪のひと」とは

年老いた人・若い人・善人・悪人というより、老いた時の「私」、若い時の「私」、善い心の時の「私」、悪い心に汚れている時の「私」とする理解

⇒ 阿弥陀仏の大悲は、私が「老・少・善・悪」といういかなる状況であつても全人生を貫き、支えとなるもの。

「ただ信心を要とす」

廃悪修善をもって悟迷を決めようとしていた従来の仏教理解を、「本願を疑うか信ずるか」によって迷悟が決まるという、まったく新しい仏教理解の確立。

⇒ 従来の仏教構造から疎外されていた人々が救われていく仏道が開かれる。

■「そのゆゑは、罪惡深重・煩惱熾盛の衆生をたすけんがための願にまします」

なぜなら、深く重い罪を持ち、激しい煩惱をかかえて生きるものを救おうとしておこされた願いだからです。

⇒ 阿弥陀仏の救いの根源にあるのは「平等の慈悲」

※ 第3条「悪人正機」との関わり